



鎮守の森だより

NPO 法人 社叢学会ニュース
第6号
2003年11月10日

社叢インストラクター養成講座 多彩な社叢の実態と調査法を詳細に学ぶ

社叢の大切さをわかりやすくガイドし、保護管理が出来る人を養成することを目的とした「社叢インストラクター養成セミナー（第1期）」が京都の伏見稲荷大社を会場に、10月18日から21日までの4日間にわたって開催されました。受講者11名、開期中は全員が同大社の参集殿に宿泊し、早朝から夕刻まで講義と実習を受講しました。又、毎夕食後は講師を囲んで、その日の講義内容や社叢に関する質疑応答の懇談会が設けられました。

第1日目の18日は、午前9時に受付を済ませた後、まず伏見稲荷大社御本殿に全員で参拝し、9時30分より講義会場である同大社儀式殿2階で開講式を行ないました。4日間のスケジュールは別表の通りです。なお、第2期セミナーは2004年7月9日～11日を予定しています。



内 容	講 師
第1日 10月18日(土)	
日程説明 開講式 挨拶 祝辞	上田正昭・社叢学会理事長 坪原喜三郎・伏見稲荷大社宮司
講義 1. 社叢の歴史、神社の成立と社叢 2. わが国の照葉樹林の現状と課題 3. 森の記述のしかた 4. 土(A層)の働きと土壤動物 5. 樹の病について	上田正昭・京都市名誉教授 服部保・姫路工業大学教授 山倉拓夫・大阪市立大学教授 武田博清・京都大学大学院教授 二井一禎・京都大学大学院教授
第2日 10月19日(日)	
実習1 稲荷大社境内 ・ 植物群落的調査手法による実習 (毎木調査・活力度・植物相調査等を含む) ・ 動物相調査手法による実習 ・ 土壤調査実習 ・ 社叢調査の実施・自然観察指導法	山倉拓夫・大阪市立大学教授 武田博清・京都大学大学院教授 菅沼孝之・元奈良女子大学教授 前迫ゆり・奈良佐保短期大学助教授 石山麻子・株式会社環境計画 自然環境研究室室長代理
第3日 10月20日(月)	
講義 6. 稲荷山を例にした社叢管理 7. 社叢の植生管理 8. 社叢の自然観察 9. 緑地としての社叢の保全活用 10. 「鎮守の森等」の調査に期待するもの 今後のスケジュール 閉講	中村陽・伏見稲荷大社権宮司 奥富清・東京農工大学名誉教授 菅沼孝之・元奈良女子大学教授 上浦木昭春・大阪府立大学教授 上田篤・京都精華大学名誉教授
第4日 10月21日(火)	
実習2 太山寺(神戸市西区)と周辺の神社 伏見稲荷大社をバスで出発 ・ 植生調査 ・ 自然観察法 ・ 社叢カルテの作成 第1期閉講 JR 三ノ宮駅付近で解散	服部保・姫路工業大学教授 上浦木昭春・大阪府立大学教授 他

← 伏見稲荷大社の社叢で実習

東アジアにおける杜の信仰と持続

—台湾、日本、韓国の比較を中心に—

講師 李 春子 氏

(京都大学人間・環境学研究科博士課程修了)

東アジアには人間と自然、そして神と関わるモリ信仰がある。森は、諸地域においてそれぞれ、土着信仰や風水または生態と結びつき、長い間多様な営みがあった。近年、都市化や開発の名のもとで、人間は自然の「森」だけでなく、信仰の対象である「杜」までも失おうとしている。このような現状において東アジアのそれぞれの地域の森を現地調査し、比較考察を試みる。

信仰の対象である神木に対し、台湾では「大樹公」、日本は「もりさん」、韓国は「堂山」などと呼称する。形態的には1本またはこんもりした森や林があるが、ここでは、諸地域における異なる呼称や形態をひとつの“杜”と位置づけて論じる。調査地は、台湾29ヶ所、日本47ヶ所、韓国20ヶ所の計96ヶ所。

杜の“信仰と場所の象徴”の視点から

東アジアの杜の信仰の営み及び杜の位置、形態、樹木の属性などを明らかにし、“土地への象徴”と“杜のカミの両義性”における人間とカミ、そして杜の相互作用を検討。

《台湾》 調査地29ヶ所の内訳は、台中19ヶ所、草屯10ヶ所。神木の種類はガジュマルが20ヶ所、茄苳(赤木)が3ヶ所、樟樹・マンゴー・その他が各2ヶ所。杜の形態は1本の神木が22ヶ所、2本以上の杜が7ヶ所。杜の立地条件は山が3ヶ所、田が6ヶ所、街中が20ヶ所。杜のカミは日常の安定と子安信仰(義子・義女信仰)。杜の祭りは8月15日前後の年1回。

《日本》調査地47ヶ所の内訳は、ニソの杜31ヶ所、沖縄のウタキ16ヶ所。神木の種類はニソの杜ではタブ27ヶ所、ケヤキ・シイが各1ヶ所、その他2ヶ所。ウタキではクバが10ヶ所、その他6ヶ所。杜の形態はニソの杜では1本の神木が18ヶ所、森が12ヶ所。ウタキでは森が15ヶ所、山が1ヶ所。杜の立地場所ではニソの杜では山が21ヶ所、田畑や家の側が10ヶ所。ウタキ

は山が12ヶ所、民家や田畑が4ヶ所。杜のカミは日常の安定と子安信仰。杜の祭りはニソの杜では11月23日で、普段は杜へ近づかない。

《韓国》 調査地20ヶ所の内訳は、慶州8ヶ所、盈徳5ヶ所、永川7ヶ所。神木の種類はケヤキ15ヶ所、松3ヶ所、銀杏2ヶ所、その他4ヶ所。杜の形態は1本か2本の神木が13ヶ所、数本の杜が6ヶ所、山全体が1ヶ所。杜の立地は山が1ヶ所、田畑が3ヶ所、村の入口が16ヶ所。杜の祭りは1月15日の未明に行なう秘儀で、普段は杜へは行かない。

以上の点から諸地域の杜の特徴をつかむことができるが、台湾と韓国は風水と水との関係がある杜がそれぞれ11ヶ所あった。又、杜と人間の関係をみると、杜のカミの呼び方として、台湾・韓国においてはお爺さん、お婆さんの意味を付した親しみのある呼称となっている。

杜の信仰の“実践と持続”

《実践》については、杜の空間的変容を、主に社会変動と人々の行為、そして行政との相互の関わりを考察し、《持続》の視点としては、《社会と個人》を取り上げ、特に杜の保存に関する条例などが杜の維持・管理にどのように作用するかを浮き彫りにした。

台湾においては、土地公と道教の宮、杜の信仰が結びつき、強い信仰の基盤となった。1970年代から90年代にかけて、杜は急速に公園化し、杜を都市開発から守る陳情運動などが起った。又、巨木巡礼の増加がみられる。

日本においては、ニソの杜は土地改革などによって土地を喪失し、杜の伐採などにより信仰が衰退したが、近年、祭りが復活している。沖縄においては、道路建設のため破壊された杜が多い。

韓国においては、社会変動としてセマウル運動などによって民間信仰を禁止したため、杜の信仰は衰退し、杜は公園化した例が多い。

次回予告(第8回関西定例研究会)

日 時：2003年11月22日(土) 13:30~15:30

場 所：伏見稲荷大社儀式殿(京都市伏見区稲荷 TEL075-461-7331)

テーマ：焼畑民の山の神 ～杜の信仰の原型を考える～

講 師：佐々木高明氏(元国立民族学博物館館長)

人間圏と神道と環境

講師 陽 捷行

(農業環境技術研究所理事長)

人間圏の誕生：約46億年前、地球が誕生してから物質圏が分化することで地球は進化してきた。地球は大気圏、水圏、土壌圏、生物圏と分化し、そして1万年前に農耕文化が始まり資源に寄生する新たな生活を始めたことで、生物圏という物質圏から新しく人間圏が分化した。その人間圏によって既往の圏の物質交換、循環に乱れを生じさせていることが現在の環境問題のもとになっている。人間圏と他の圏との軋みを如何に調和するかが環境問題の解決へとつながると考えられる。また20世紀は宇宙から地球を眺め、地球環境問題を認識した時代といえる。文明史上、最高の高度からの俯瞰的視点を獲得することが出来、その結果大きな時空スケールでの来し方行く末を見て、人類のあり方を考えることが出来た。このことは、21世紀に生きる我々は環境の視点から経済をはじめ、倫理や文明を考えるべきであることを示唆している。

万物流転：ギリシャ哲学の中で「全ては流転している=Everything flows」という言葉があるが、人間はこれまでに「めぐる」ことの出来ないものをたくさんつくってきた。それらは「めぐる」ことの出来ないまま溜まり続け、うまくコントロールできないために我々の地球の生命システムを窮地に追い込んでいる。現代水は汚れ、空気は変質し、土は流れ、生き物の生活基盤を無くしかけている。

自然界の物質は窒素・リン・炭素などの原子にいたるまで全て循環しており、無駄なものなど何もない。しかし地核から重金属を掘り上げた結果、1万年目の人間圏で問題を引き起こしている。我々はこの万物流転の教えに帰依する意識が重要である。

神道と環境：人間圏と他の圏との調和の問題は、科学はもちろん哲学や宗教の分野でも度々問題にされてきている。特に共生と循環を考えるとときに神道の教えは何らかの鍵となり得ている。

文明生活の便利なものとして、育んできた目に見える技術知と、人間が時間をかけて思考し得てきた

目に見えない実際知がある。古神道の概念はエコロジーの概念であり、実際に我々が得てきた実際知といえよう。西欧の宗教は神との契約を結んで成り立っているが、日本の神道では自然との共生で成り立っている。それは太陽、山、海といった自然を日本の環境神として崇めていることから理解できる。天象・気象・地象・内陸・河川・池沼などが、土壌と大気との関連において呼吸しているのである。

鎮守の森：鎮守の森は地域社会の文化や風景の母体となり、「何事のおわしますかは知らねども有難さにぞ涙こぼる」と表現されるように21世紀に向けた生命の基盤、生態的な価値を持つものである。萩の金谷天満宮では、鎮守の森は洪水時の避難場としてヘビ・カエル・ウマ・ウシなどが共生していた。このように様々な要素が入り込み、人の作用を入れて律動が出来、それを人が守ろうとするもので、さらには人の生活の中から生まれ出るもので、なおかつ心が潤うものである。鎮守の森を考えることは、社叢の境界、地球の境界、人間の境界という環境の境目を知ることになる。環境はバリアの研究とも言えることが出来る。

社叢は一つの生命体としてとどめることなく、さらなる広がりを持たせ他の社叢とのつながりを大切に発展に向かったものでなければならぬ。**寄生の時代から共生の時代へ：**20世紀には地球の資源に寄生し、科学技術を活用した成長の魔力に取り憑かれた世紀であった。と同時に、その結果逆に環境問題の深刻さを我々に想起させた。

日本社会には自生した文明社会(神道を基とした)と活性化した生態系(社叢を代表とする環境)との間に巧妙なシステムがあった。私たちと自然との関わりは作法があり神道の精神は、物質・エネルギー・環境問題が寄生から共生に転換されるときに深い知恵を提供してくれるのではないだろうか。

(文責：本多麻衣)

※ 前回の報告は、鍵和田又一さんでした。

次回予告(第8回関東定例研究会)

日時：2003年12月13日(土) 14:00~17:00

場所：東京農業大学・世田谷キャンパス 18号館1階1811教室

(世田谷区桜丘1-1-1 Tel.03-5477-2428)

テーマ：鎮守の森におけるCO₂ 吸収量調査報告

講師：大崎 正治 (國學院大学経済学部教授)

bookbookbookbookbookbookbookbookbookbookbook

書籍紹介

bookbookbookbookbookbookbookbookbookbookbook

「下鴨神社と糺の森」

賀茂御祖神社・編

社叢学会は、2002年5月26日、京都の賀茂御祖（下鴨）神社の糺の森研修道場で創立総会と研究大会を開催し、誕生した。本書は、当学会誕生の地である下鴨神社と糺の森を、歴史、建築、祭礼、宗教、文学、史跡、植物、環境など、さまざまな角度から各専門家が解き明かしている。

執筆者は上田正昭・京都大学名誉教授、山折哲雄・国際日本文化研究センター所長、梅原猛・国際日本文化研究センター顧問、四手井綱英・京都大学名誉教授など12名。社叢の研究と調査は諸学を結集して、学際的に進めなければならないという当学会の理念を、まさに具現した一冊ともいえる。

淡交社・定価 1,714 円（税別）

事務局から

- 平成16年度の総会並びに研究大会は名古屋市を会場に5月(9日予定)に開催することが内定しました。当日の研究発表者を下記の要領で応募中です。奮ってご応募ください。なお、平成16年3月刊行予定の『社叢学研究』への投稿も募集中です。

編集後記

思い起こせば去年の今ごろでありました。いきなり「1月から2カ月おきに機関紙を出すよーに！」と言われ、「ひえ～ そそそそ、そんなゴムタイな…」と悲鳴をあげたのは。でもほら、ちゃ～んとうして6号が出たじゃありませんか！ 陰にはフジオカの汗と涙の… じゃなくてえ、会員の皆さまの暖か～いご支援のおかげでしょうが！ ハイ、これからもがんばりま～す！！（藤岡 郁）

《社叢学研究》投稿のご案内

平成16年3月刊行予定の当学会誌「社叢学研究」第2号掲載の論考等を募集いたします。下記の投稿規定をご参照のうえ、原稿をどしどしお寄せください。

投稿規定

1. 投稿資格は、社叢学会正会員または正会員1名を含むメンバーとする。
2. 投稿原稿は、論考・研究ノート・資料紹介・森に関するニュース・その他とする。
3. 投稿原稿は、原則として400字詰め原稿用紙40枚以内とする。図版・写真等はその枚数に含める。なお、原稿をフロッピーで提出する場合は打ち出し原稿を添付する。
4. 投稿原稿の採否は、編集委員会において決定する。
5. 投稿原稿は、原則として返却しない。
6. 掲載原稿執筆者には掲載誌5部を進呈する。抜刷は希望に応じ執筆者の負担において作成する。
7. 投稿原稿の提出先は、社叢学会事務局とする。
8. その他必要な事項は編集委員会において決定する。

原稿締切日／平成16年1月末日必着

研究発表者募集！

テーマ	社叢に関する理論的研究 社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究
発表時間	20分(報告15分+討論5分)
応募締切	平成16年2月末日必着
※	応募者は住所・氏名・職業を明記の上、発表内容を300字～400字にまとめて事務局(大阪)に御送付下さい。
※	応募者多数の場合は研究発表審査委員会で審査し、3月末に採択通知を致します。
※	採択が決定し、大会当日に配布する資料は4月末までに事務局に御送付下さい。

発行人 社叢学会事務局 〒540-0012 大阪府中央区谷町2-2-22 NSビル5階
 TEL/FAX06-4790-0155 E-Mail jim@shasou.org
 社叢学会関東支部 〒171-0021 豊島区西池袋2-36-1 ソフトタウン池袋1101
 TEL03-5950-6507 FAX03-5950-5184 E-Mail shasou@macrovision.co.jp